教職大学院の「学び」を省察する

教職実践開発専修院生　　舟　木　仁　志

１．教職大学院に入った動機

私は愛知教育大学で４年間の勉強や教育実習等を通して教師に必要な力量を学んできた。しかし，このまま先生になり教壇に立ってやっていけるのか不安であった。授業だけでなく生徒指導や校務分掌など知らないことが多く，いろいろと自分に問いかけてみて，まだまだ不十分だと考えた。そして，もっと力をつけてから教師になるべきだと思った。そのときに知ったのが教職大学院の存在であった。既存の大学院とは違って専門教科の研究ではなく，より実際の学校現場に即した実践的な講義や臨床実習がカリキュラムに組み込まれていた。そこで，教職大学院を志望し，受験した。

２．講義を受けての感想

（1）学部段階との違い

学部段階と違う点は現職の先生方と一緒に勉強をすることである。院生22名のうち，14名が現職の先生であり，大学院の授業ではグループで話し合う場面が多くある。その時，現職の方と議論することができ，とても勉強になっている。学部段階の時だと議論を行ってもそれが正しいのか・実際はどうなのかが曖昧なままであったが，教職大学院では現職の方に聞いて，確認することもできる。そのほかに，院生が課題を持って調べたり考えたりする課題解決型の授業が多くある。

授業をしてくださる先生方の中には，現場での経験がある実務家教授の方もいらっしゃる。学部段階までの講義とは違った視点で授業が展開されており，とても良い勉強になっている。

（2）授業科目

１年目の前期は共通科目が多く，スクールマネジメントから特別支援教育まで，幅広く勉強した。私にとっては知らないことが多く，視野を広げることができた。後期になると，共通科目は２コマだけで，選択科目が多くある。私は授業開発コースであるため，“授業分析の事例研究”や“授業及び子ども理解の技法の開発と改善”などの授業をとっている。具体的には，小学校・中学校・高等学校の研究授業を参観し，その授業について多方面から授業分析をし，議論して，授業改善の方向を明らかにしている。

３．現職の先生方と一緒に学ぶ意義

現職の方と一緒に勉強する良さは，目指す教師像が見えてくること，実践的な知見が身につくこと，困ったことを教えていただけることなどが挙げられる。例えば中村先生は私と専門教科が

同じ“体育”ということもあり，様々な相談にのっていただいている。また，いろいろな教科や校種の先生方と出会うことができ，人間関係を広げることができることも良い点としてあげられる。ただ，講義の中で，現職の方にはすぐに理解できることでも，現場の経験がない私にとっては分からないことがある。しかし，講義だけで答えを求めるのは不十分であり，臨床実習で様々な実践を通して，理解することも大切であると考えている。

４．臨床実習

今年度のストレートマスターには２年間を通して，３つのコースごとの臨床実習が課せられている。１つ目は，授業開発臨床実習で，単元指導案の計画・立案の上で留意しなければいけない事項を明確にすることや，教材や指導方法の留意・改善すべきことなどについて学習する実習である。２つ目は，学校教育臨床実習で，生徒指導・教育相談の役割を行い，道徳教育や特別活動の授業を開発・実践する実習である。３つ目は，学校改善臨床実習で，学校経営の基本的な領域を中心に学校組織における教師の役割を実践的に学習する実習である。

すでに授業開発臨床実習が終わっているため，そのことについて述べていきたい。実習を通して，多くのことを学ぶことができた。授業を参観する際の視点を増やし，自分の授業を見つめ直すことや，子どもから出た意見をどのようにつなげて，深めていくかなど多岐にわたる。

大学院の臨床実習は学部の時と違い，定期的に実習校に伺う。そのため，実習校の指導教員の先生に直接指導を受けるだけではなく，実習と実習の間に疑問に思ったことなどを，実務家教授の先生や大学院の現職の方に聞くことができる。また，実務家教授の方と同じ授業を見たり，私の授業を見ていただいたりして，その後１対１で指導していただいた。本当に良い勉強になっている。

（1）ハードル走の実践

学部の教育実習と違う点は，１つの単元をすべて計画し，実践したことである。学部の時は指導教員の先生が行っている授業の単元の中で，１つか２つの授業を行うと思うが，臨床実習では，私は，小学校５年生の“ハードル走”の単元すべての授業を行った。実施時期は大学が夏休み中である９月に集中的に行った。９月に授業を行うにあたって１学期から配属学級の子どもとの関係を作ってきたことや，子どもの性格・運動能力等を事前に把握しておいたことが，授業を展

写真１　新聞紙を用いての練習

開するのにとても役にたった。ハードル走の授業を考えるにあたって，実習校の既存の授業案をベースにしながらも，大学院で学んだことをいかして，授業開発という視点で，自分の考えを入れて作ってみた。その際，いろいろな資料や先生方の助言を参考にして授業を組み立てた。授業では，事前調査から，ハードルに対する不安があったため，１時間目は１台，２時間目は２台のハードルしか使わないというようにするなど，各時間のねらいを明確にした。また，ゴム紐を使うことや，新聞紙を用いて振り上げ足の習得の練習をするなどの場の設定・工夫を行った。写真１は新聞紙を用いて振り上げ足の練習を行っている場面である。

写真２はハードルにスポンジをつけて練習を行っている様子である。

写真２　スポンジを用いての練習

そして上達の流れを推測して，スモールステップの考えを取り入れた。私は，児童が主体的に取り組むような授業にしたいという思いがあり，場の設定や発問の工夫などいろいろと考えて，万全の準備を行ったつもりであった。しかし，実際の授業ではうまくいかないことばかりであった。主体的に取り組ませることを“指導して”行うことの難しさを実感した。例えば，ハードルの間を奇数の歩数で走ると良いということを，子ども自身が気づいて，どうすれば奇数で走れるか主体的に取り組む工夫を考えた。

写真３　授業の様子

写真３は，班ごとに2台目のハードルの位置を考えて，走りやすい位置を探している様子である。

写真４　お手玉を使って練習している様子

写真４はお手玉を使って，走った軌跡を視覚的に分かるようにした。児童が主体的に活動を行い，気づくように考えたが，授業では私が説明してしまったところが多くあった。

（2）実践を通して学んだこと

今まで勉強したことを授業で実際に生かすためには，自分の力量がまだまだであること・何ができないか理解できたことが収穫であったと思う。また，１つの単元を見通して授業を作る大切さ・大変さ・課題を知ることができた。これらの課題もふまえて，入学時に当初掲げた大学院での研究テーマを見直すことができた。

授業以外で学んだことは，学校の教育目標や教育計画を実現するために行っていることを聞いたことや，運動会などの行事の時に自分の役割をいただいたことによって，教育目標の実現に向けて活動を行っていることを理解した。また，全校研究会の事前研究・授業・当日の研究会にも参加させていただき，校内研修の重要性，力量のアップをはかられていることが分かった。

５．来年度の見通し

来年度はまず，前期に学校改善臨床計画に基づく実習を行う。個人的な学びについては，実習を通して浮かんできたことをもとにして，研究テーマを『子どもが主体的な学びを行うために授業の導入・展開・まとめをどのように工夫し，組み立てていくか』が研究テーマにしているため，仮説を立て，実習校で実際に行うことを通して，自分のものにしていきたいと考えている。

教職大学院では，現職の先生は，第２年次は原則，金曜日以外は自分の赴任校で勤務さる。私のようなストレートマスターは現職の先生方の自分の赴任校での授業を見させていただくことができる。今年度は，臨床実習の連携校の研究授業や中間発表会での授業を見させていただいて，実践力をつけてきたが，来年度からはより多くの授業を見せていただくことを楽しみにしている。また，来年度に新しく入ってくる現職の方もいる。このような方々と出会えた縁を大切にして，指導していただき，自分の力量を高めて行きたいと考えている。

教職大学院を卒業した後は岐阜県の教員になることが決定している。学部出身の初任者とはひと味違うことが要求されている。学部では学べなかった講義や従前の実習では学べなかったことが身についている自信があるため，初任者から一人前の教師として見られるように，今後も勉強してきたいと考えている。